

万里の長城・その盛衰小史——小倉芳彦

今年の2月に、ニクソン・アメリカ合衆国大統領の一行が、万里の長城の壁の上に立った写真は、まだわれわれの記憶に新しい。筆者ももう5年前のことになるが、短期の中国旅行の途中で、ニクソン大統領一行が訪れたのと同じ八達嶺と呼ばれる一角に案内された。

北京のホテルからバスで、張家口へ通ずる鉄道に沿って1時間半ばかり西北に走ると、居庸関の城門址に着く。居庸関から八達嶺までは30分たらずである。バスから降りたつと、写真でおなじみのあの城壁が、稜線にえんえんと延びている。城壁の高さ6.6m、底部の幅6.5m、上部の幅5.5mと聞いた。壁上の石畳はひどく急で革靴では滑る。やっとの思いで狼火台にはい上ると、うねり続く長城の迫力が、いっそう強まった。外人の観光客や、中国人の男女学生でかなりにぎわっていたが、構築が最も堅固で、現在も保存・修理がゆきとどいているのはこの八達嶺付近の一部だけらしかった。

それにしても、眼前に巖として実在するこの長城は、われわれに深い感慨を呼びおこさせる。文字

どおり、「山をけずり谷を埋めて」つくられた長城には、中国の歴史そのものの重みがかかっている。それは中国人の政治への意志力と中国人民の技術と労働の強靱さとを、見る者に黙々と、力強く語りかけてくる。

ところで、万里の長城といえはすぐ秦の始皇帝の事業として思い浮べられやすいが、現存する長城は、むしろ2000年以上も前のままではない。第一に場所からしても、図に示したように、現在の長城線より、はるか北方を東西にのびていた。そのころモンゴリア高原で優勢となった、匈奴という騎馬民族遊牧国家への防御線として設けられたもので、漢代には黄河上流方面が強化されている。第二に、工法も現在のように堅固なものではなく、遺址から推して、黄土に木の枝をまぜて突き固めた版築法である。万里の長城築造に夫を徴発された孟姜女が、帰らぬ夫を尋ねて長城下に至り、流した涙で長城の一角が崩れて、夫の遺骨があらわれ出たという説話が、中国の民間に語り伝えられた。秦の政治への恨みと怒りをこめた伝説

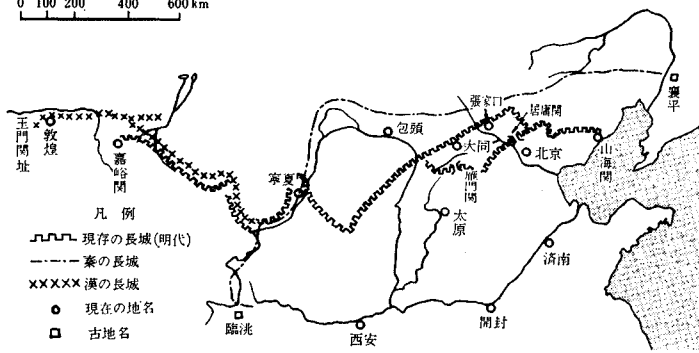
だが、涙で崩れる程度のつくりでないと、この話も現実味がない。第三に、秦の長城といわれてはいるが、実は、秦が戦国時代の分裂を統一した221 B.C.以前から、すでに戦国の諸国は——燕・趙それに秦自身も——遊牧民に備えて長城を築いていた。秦が統一帝国となって、それらを継続したまでであって、始皇帝一代——巖密には10年間しかない——で、いっきに完成されたわけではない。

それでは現存の長城はいつ築かれたか、というと、明王朝一代を通じて、15~16世紀にかけて築造されていったのである。秦・漢時代から明代に至る1000余年の間に、この地域に長城が全く存在しなかったわけではないが、いまはそれを詳述する余裕がない。

明王朝は、それまでのモンゴル人の元王朝の支配に反抗し、1368年に南京を都に成立した。やがて元の政府を北京からモンゴリアに追放して、中国の統一に成功したが、明一代を通じてモンゴリアの遊牧民族との緊張関係が続いた。15世紀にはオイラト部が、16世紀にはタタール部が強力となって、あるいは明の皇帝が捕虜になったり、北京近くに攻め込まれたこともあった。それらに備えるために、営々として長城が築かれたのである。しかし17世紀に入って、東北辺から山海関を突破して中国内地に進出した清朝の時代になると、万里の長城は、軍事的には、まさに無用の長物と化した。しかし、それは中国文化の象徴として、現在も存在し続けている。

(筆者・学習院大学教授 文学部史学科)

0 100 200 400 600 km



万里の長城位置略図